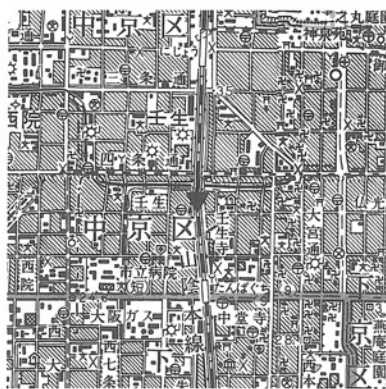


京都・平安京跡右京五条一坊一〇四町

- 1 所在地 京都市中京区壬生高樋町・松原町
- 2 調査期間 二〇〇六年(平18) 八月～十二月
- 3 発掘機関 (財)京都市埋蔵文化財研究所
- 4 調査担当者 加納敬二・東 洋一・田中利律子・吉村正親
- 5 遺跡の種類 都城跡
- 6 遺跡の年代 平安時代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要



(京都西北部・京都東北部・京都西南部・京都東南部)

調査は、J R山陰線複線高架工事に伴う発掘調査である。対象地は西高瀬川から松原通までの総延長距離約四五〇mで、現高架下西側の幅三～四mの南北側道である。調査地は平安京右京五条一坊の東端部にあり、東を朱雀大路、西を坊城小路、北を四条大路、南を五条大路に囲まれる。その中を、東西方向の道路である綾小路・五条坊門小路・高辻小路が通る。

朱雀大路と皇嘉門大路に挟まれた二町域は「坊城の地」とよばれた特別の区域にあり、調査地はその中に含まれる。調査地の北には四条大路から北への東西二町、南北四町に及ぶ広大な敷地をもつ嵯峨上皇の離宮・朱雀院の存在が知られている。近辺では一九九六年の同町の調査で平安時代の池状堆積を検出し、池内から「細工所飯影肆×・大原」と記載された木簡が出土している(本誌第二二号)。今回の調査で五条一坊三町で平安時代前期の洲浜と池を検出した。池内から平安時代前期(八世紀末～九世紀中頃)の土器や瓦、銭貨、木製品などがまとまって出土した。木製品の中に、判読できる木簡が二点認められた。

8 木簡の釈文・内容

(1) 〔道カ〕様文内可行米一斛八斗四升

・ 料米六斗 人別二升 功銭一貫
六合人別二夕 醴一斗八升 人別六合 (205)×40×1.2 081

(2) 〔続梨〕□ (155)×32×1.5 059

(1)は上下が折損している。食料・功銭支給に関する記載がある。裏面の米二升は成人男子に対する一日分の標準給食料である。対象者三〇人に一律の条件で一日分の支給を行なったことがわかる。「六合人別二夕」は上部欠だが、支給量が米の百分の一で、塩支給

とみて間違いない。一方、功銭に関する記載は、総額部分の「一貫」の下が欠けているため、内容を確定できない。ただし、対象者三〇人、総額一貫以上二貫未満だから、人別支給額は三四・六六文ということになる。奈良時代の類例と比較して高額であり、インフレーションが進行した九世紀中頃の社会状況を反映している。「醴」(コサケ)は安価な甘酒(一夜酒)である。正倉院文書・木簡などには造営・運輸関係の肉体労働者・技術労働者に対する酒・酒糟の支給事例が散見する。この木簡の場合、対象者が三〇人と比較的多数だから、造営事業関連と推測される。表面は解釈が難しいが、「様」が「ためし」製品の見本の意だとすると、裏面の記述を造営事業関連とする推測の傍証になる。

(2)は上端を尖らせて下半部は折損している。片面は墨書が剝落している。『延喜式』内膳司雑菓樹条に内膳司の園地に「続梨百株」とみえ、つぎなし(接梨)はつぎ木をした梨の木という。

なお、木簡の釈読にあたっては、京都大学の西山良平氏、奈良女子大学の吉野秋二氏、上野勝之氏のご教示を得た。

9 関係文献

(財)京都市埋蔵文化財研究所「Ⅳ平安京右京五条一坊一・四町跡」
 『平安京跡・御土居跡』、二〇〇七年)

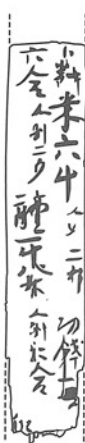
(加納敬二)



(2)



(2)



(1)



(1)

